



『北海道廃線紀行』

草原の記憶をたどって

著者
芦原伸
筑摩選書 / 1870円

北の大地に眠る鉄路が
近現代史を語りだす。
この夏、訪れたいくなる
郷愁を誘う紀行文

評者
山内昌之
歴史学者・武蔵野
大学国際総合研究
所特任教授

北海道は広すぎる。そして、知らない廃線も多い。小樽のような街にも、市の中心部に堂々と廃線がある。この手宮線は、明治初期に北海道初の鉄道が手宮と幌内の間に敷設された名残だ。石炭を積み出すためである。著者は、南小樽と手宮との間にあった「色内仮乗降場」という名を紹介する。地元の間でも色内駅と呼んでいた。日銀旧小樽支店と寿司屋通りの近くにあるから観光客にも人気があるらしい。著者は北海道の事情に精通しており、本書は異色の観光案内書にもなっている。

北海道の廃止された路線の名前を見れば、終起点を想像できる人も多いだろう。桑園(札幌市)と石狩沼田を結んでいたから札幌線なのである。しかし、新十津川と石狩沼田の間が廃線になると、新しい世代では札幌線の名もピンとこなくなつた。いまでは、学園都市線という愛称で呼ばれている。新十津川は奈良県の十津川村住民が移住した開拓集落から発展し、石狩月形は樺戸集治



監(刑務所)の初代典獄(監獄長)のヒューマニスト月形潔の名に因むなど、旧駅と廃線の名を通して北海道の歴史を伝えてくれる書物でもある。「日本海をめざす鉄道路線」とはうまいネーミングだ。その一つの岩内線は、むかしのお笑いの「なんにもいわない」で知ら

あしはら・しん / 46年生まれ。ノンフィクションライター、紀行作家。北海道大学卒。「旅は終わらない」「ラストカムイ」他

の出身地だった。廃線は思いがけぬ歴史の記憶にも結びつく。

万字線の名も数十年ぶりに聞いて懐かしかった。直線でいえば夕張に近いが、別に石炭を運ぶ線が万字炭山から室蘭本線の志文駅までつながっていた。これらは旧国鉄やホクタン。こと北海道炭礦汽船の盛衰とも結びついている。わずか二三・八キロの万字線は、南小樽から手宮まで二・八キロの手宮線のように、幻視と郷愁を呼び起こす。高倉健や寅さんの映画に北海道の廃線など線路がしばしば登場するのは、自然と歴史が何気なく交差する土地だからである。

やまうち・まさゆき / 47年、北海道札幌市に生まれ、小樽で育つ。専攻は中東・イスラーム地域研究と国際関係史